お題目はなぜ唱えるものなのか
――常不軽菩薩の振舞――

苅　谷　玄　翁（定彦）

はじめに

お題目が口唱、即ち、あくまで声に出して唱えるものであることは全く自明のことであって、あらためて問うべきことではないように思われよう。『法華宗教義綱要』を見るに、『十三問答抄』の「日蓮宗（法華宗）と云ふは……口唱宗なり……」を挙げて、「経力易行の信心は身口意の三業の所作を總持する口業に任せて下種の妙法蓮華経を口唱する故に口唱宗であり」（七～八頁）とある。さらに、周知のように『諫暁八幡抄』には、

「今日蓮は去建長五年四月廿八日より今弘安三年十二月にいたるまで二十八年が間又他事なし。只妙法蓮華経の七字五字を日本国の一切衆生の口に入レンとはげむ計也　此即母の赤子の口に乳を入レンとはげむ慈悲也」（『定遺』1844頁）

とあって、日蓮自ら、立教開宗の日から今に至るまで、只、南無妙法蓮華経と口唱して、日本国の一切衆生に聞かしめてきただけであるとある。さらに『観心本尊抄』は、その最後にこのお題目について、

「一念三千を識らざる者には、仏大慈悲を起し、五字の内に此の珠を裹み、末代幼稚の頸に懸けしめたまう」（『定遺』720頁）

とあって、天台止観の一念三千の観法を破して、滅後末法にあって末代幼稚のものの成仏行は、妙法蓮華経の題目に限ることが示されている。

しかし乍ら、その題目をなぜ口唱するのかについては、直接的に明示された個処はないように思える。

この点について、すでに拙稿「法華経と日蓮聖人」[(1)]で考察したところ

であるが、それは、今にして言えば『法華経』についての考察が全く未熟であり、日蓮についても、特に題目の口唱という点に関して、これまた全く未熟であった。それ故、ここに再考して、少しでも宗祖日蓮の信仰に近づかんとするものである。

一

インドにあって、凡そ「経」は全て「如是我聞」（私は仏から次のように聞いた）で始まり、仏の言葉（仏陀釈尊の金口直説）であるとするが、それは、歴史的事実として、全ての「経」に該当するものではない。それら「経」は今日では二つに大別されるのであって、一つは『阿含（経）』（パーリー語聖典、五ニカーヤ）であって、南伝仏教圏（スリランカ、ミャンマー、タイなど）で「経」といえばこれだけであって、それ以外のもの、例えば『法華経』などは全く「経」とは認められていない、と言うよりは存在しないのである。もう一つは、歴史的実在の人物たる仏陀釈尊の入滅後、数百年も経た頃に登場してきた所謂「大乗経典」類、さらには、それよりさらに遅れて出現した密教経典である。

それ故[2]、これら新しく登場してきた大乗経典類は「経」とは名乗ってはいるが、仏陀釈尊に非ざる一人の無名の部派仏教の正規の比丘――それは勿論仏教教理に精通したものであった――の創作したものであり、その作者の懐いた一つの主張（信仰）の表明書なのである。

このことは、すでにその登場当初から伝統的正統派仏教（部派仏教）の側からは、

「これまでおまえの聞いたこと（＝『般若経』）、それは仏陀の言葉ではない。それは（誰かある）詩人が作った詩（文）にすぎない。しかし、私（部派仏教の比丘）が話すこのことは、仏陀（釈尊）によって話された仏の言葉なのだ」（『大乗仏典３　八千頌般若経Ⅱ』113頁）

と述べられていて、当の『般若経』自体がいわば認めるところであった。この点は『法華経』においても全く同様であって、

「じつに我々（『法華経』の作者と唱導者）について（さらに次のよう

に）言うでしょう。『これらの比丘たちは利得と名誉に執われたもので、じつに外道のものだ。自分勝手な詩文を説示している』と」（『法華経』「勧持品」偈［8］）

「我々を罵るものたちは、（さらに言うでしょう）『利得と名誉のために自分勝手に経々を（捏）造して会座の真中で説き語っている』と」（同、偈［9］）

とある。勿論、『法華経』の作者はこれを自分たち（『法華経』作者とその唱導者たち）に対する非難、罵り、悪口と捉え、それに耐え忍んでいくのだというのであるが、歴史的事実として、仏陀釈尊の入滅後のいく度かの“結集”（経典編纂会議）によって承認され、伝承されてきたところの『阿含（経）』には全く含まれていない『法華経』などは「経」（仏陀の金口直説）ではない、即ち非仏説、それどころか経の贋物だと言われて当然であったのである。それ故に、このことを熟知するこれら新経典の創作者たる仏に非ざる無名の比丘にとって、いかにこれこそが真の仏の教えだと確信するところであっても、それを「経」としてただ闇雲に仏教界に発表することなど決し出来なかったのである。なぜなら、経の贋物造りは、世間でいえば贋金造りであって、それの大罪であることは仏教の世界においても変りはない。凡そ比丘（仏教の出家修行者）にとって、犯すべからざる大罪として淫（一切の性行為）、殺（人殺し）、盗と大妄言の四つがある。そのうち大妄言とは、己が未だ覚りを得ていないことをはっきりと自覚しながら、他人に向かって“覚りを得た”と妄語（うそ）を言うこと[3]であって、これら四つの罪を犯したものは、比丘という身分を剥奪され、僧伽（教団）から追放されるのであって、「経」の贋物造りは、まさしくこの大妄語という重罪に等しいものであった。それ故、これまで仏陀釈尊の金口直説として伝承されてきた『阿含』には存在しない『法華経』などの新しい「経」の創作発表は、その創作者たる比丘にとって、まさに自己の比丘（真の仏弟子）としての宗教的生命を賭した行動であったと考えなければならない。

こうして、『法華経』を創作した一人の仏に非ざる無名の比丘にとって、これぞ真の仏教なりといかに確信するところであっても、それを

「経」（仏陀の言葉）として世に問うに当っては、綿密な熟慮が不可欠であった。即ち、『法華経』作者は、仏陀釈尊の成道、初転法輪から、現時点の〈仏滅後〉無仏・悪世に至るまでの仏教の歴史的展開を踏えて、そこに自己の信得した真の仏教なるものをしっかりと位置づけ、その上に立ってこれを聴くものをして「経」（仏陀の金口直説）であると受入れられるように、しっかりとした一つの構想を樹立し、その構想の下に首尾一貫した一つの宗教文学作品を創り、それを『法華経』と命名して、ここにはじめて世に問うに至ったのである。

それでは、このものは、どうして一歩踏み誤れば、大妄語の大罪に堕す危険を犯してまで、『法華経』を創作し、世に問うに至ったのか。それには、このものはいかなる状況下にあって、いかなる問題意識をもち、そこからいかなる解決策を見出したのか、総じて作者の『法華経』創作の意図こそが究明されなければならないであろう。

ここにおいて、『法華経』創作者として一人の比丘を想定するに、彼は世俗世界における業による輪廻転生を基盤とする己の人生を苦そのものと観じ、そこからの解脱は唯一出家の宗教によってのみ得られるというインド宗教界の共通認識に基づいて出家、即ち世俗世界の一切を放棄して、出家の宗教の一つたる仏教に入ったのである。その当時の仏教は、涅槃寂静を目指す阿羅漢道（伝統的正統派の部派仏教）と、正覚の獲得・成仏を究極とする新興の菩薩道（大乗・菩薩乗――その主流は『般若経』）――の二つに分かれていたが、このものは勿論、己の成仏を求めて大乗・菩薩乗（『般若経』）の比丘となり、その教義の研鑽と実修（瞑想）に励んだのである。しかし、程なくして、それによっては正覚の獲得など到底得られない自己の凡夫たることを痛感したのだと思われる。しかもその上、痛切に懐いた想いは、今は〈仏滅後〉、仏不在の時代、無仏・悪世に他ならないという時代認識、歴史認識であった。この〈仏滅後〉無仏・悪世という歴史認識と、そこに投げ出された、謂うなれば仏から見捨てられたところの、成仏を求める比丘でありながら凡夫だという自己認識とにしっかりと立脚した上で、それでも自己の成仏の可能性を求めてさらに瞑想（坐禅観法）に沈潜したのであり、その観法

の中心となるものは'bodhisattva'（ボサツ・菩薩・ぼさつ）の観念であったことは言うまでもない。

そして、その坐禅観法の内から得られたものは、もし真の仏教が、伝統的正統派の部派仏教に対抗して新たに興ってきた大乗・菩薩乗の『般若経』の主張してやまないところの、成阿羅漢道ではなく成仏道、即ち正覚を獲得して仏に成る教えであるならば、たとえその大乗・菩薩乗に絶望した凡夫の自己であっても、己は本来から、即ち全く無条件に'成仏確定者'としての「ぼさつ」であるはずである、否、そうであらねばならないというのがこのものの確信であったのである。なぜなら、この己が仏から見捨てられた凡夫であろうとも、生れながらにして、「本来からぼさつ（成仏確定者）」であるならば、後はぼさつ行——それが何であるかは措くとして——の実践によって、それがいかに遠い先のことであろうとも、自己の成仏は絶対的に保証されるからである。

ところで、その場合、この凡夫の自己の「本来からぼさつ」であることは、単に自分の懐いた願望、というよりは、まさしく己の偏見、ないしは独断の他の何ものでもないのではないか。ここに思い至った時、このものは自己の本来からぼさつであることの根拠を求めて、さらに瞑想を深めたのであり、その極において、もしも「一切衆生が本来からぼさつである」ならば、その一切衆生の一人たるこの仏から見捨てられた凡夫としての自己もまた「本来からぼさつ」であることが理の当然として成り立つという結論に到達したのだと思われる。その場合、「一切衆生は本来からぼさつである」ということが、何人によっても否定されえない絶対的真理であるということは、仏教の次元にあっては、まさしく仏陀釈尊の金口直説であるということによってのみ証明されるのである故に、彼は「一切衆生は本来からぼさつである」ということは「如来の智慧の直観」（如来の智慧による（衆生）洞察、仏智による直観、『妙法華』「仏知（の）見」）に他ならないとし、仏はこの仏知の見（「一切衆生は本来からぼさつである」）を衆生に示し、衆生をして理解せしめ、悟認せしめ、さらにはその仏知見の道（実践）に導き入れること、これを要約して「ぼさつを鼓舞すること」（『妙法華』「教化菩薩」）と言い、これこそ

が仏の世に出現し説法する唯一の、即ち究極の任務（仕事）であるとしたのである。

こうして、このものは『法華経』を創作して、広く世間の人々に語って聞かせる（唱導）に至ったのである。しかも、その場合に決して看過してはならないことは、〈仏滅後〉にあって仏から見捨てられたものなるも、本来からぼさつであることに依ってのみ自己の未来成仏があると確信するこのもの達にとって、『法華経』の創作とその唱導は、『法華経』の伝道・弘通というような二次的なことではなく、じつにその出家からの究極目標たる成仏を目指してのまさに“ぼさつ行”そのものに他ならなかったことである。この『法華経』の創作・発表こそが、〈仏滅後〉に投げ出された作者自身にとって唯一の成仏のためのぼさつ行であったのであり、そのことを説き明かすものが、本来の『法華経』の「如来寿量品」に続く「常不軽菩薩品」なのである。

二

ここにおいて、お題目はなぜ唱えるものなのかに応えるには、この「常不軽菩薩品」に説かれる常不軽菩薩の振舞が注目されなければならないのである。

それは、周知のように、昔、威音王仏の〈仏滅後〉に、ある一人の菩薩・比丘が巷で出合う人毎にいつも、「私はあなたを軽蔑しません。あなたは軽蔑されない方です。なぜなら、あなたはぼさつ行を行じなさい。あなたは如来・応供・等正覚者になられます」と“呼びかけ”て廻ったという。それで、人々は彼に「いつも“（あなたは）軽蔑されない方です”と言う男」という綽名をつけたのであって、彼は僧院にあって、すでに比丘の基本的修行たる経典の暗誦や講説（教義の発表、討論）を済ませていたので、毎日僧院から巷に赴き、そこで出合う人の一人ひとりに向かって、老若男女の別なく、また一人も漏らすことなく、この“呼びかけ”をなしたという。一方、このように唐突に“呼びかけ”られた人々の多くは、これを受け入れるどころか全く逆に拒絶反応を示し、中には土くれや棒切れを投げつけるものもあった。しかし、彼

はそれらが届かないところまで逃げて、その上でそこから大声でこの“呼びかけ”を聞かしめたという。

こうして恐らく数十年が経過して、彼が死期を迎えた時に、かつて威音王仏が説いた『法華経』を誰かが語る空中からの声によって聴聞し、それをしっかりと把握、了解したのであり、そこで超神秘的付与をなして寿命を延ばし、今度は『法華経』を人々に説いてまわったという。さらには、後生において、二万億の“月の音の王”という同名の仏の、在世に生まれ合せた時には菩薩として仕え、〈仏滅後〉にあっては『法華経』を得て、それを説き聞かせたのであり、さらに二万億の“太鼓の音の王”という同名の仏のもとでも、さらに二万億の“雲の音の王”という同名の仏のもとでも同様であったという。

そして終りに次のようにあって、この話は結ばれている。

「ところで、得大勢よ。お前には、その時、その期にかの『いつも“あなたは軽蔑されない方だ”と言う男』と綽名された菩薩、(即ち)かの威音王如来の(〈仏滅後〉の)教誡下で四衆から、『いつも“あなたは軽蔑されない方だ”と言う男』という名で認められていたもの、(しかも)彼によって(後生の無量生において)これだけ多くの如来たちが喜ばされた(=出会い、供養された)もの、その人は誰か別人のことという疑い、あるいは疑念、疑惑があるかもしれない。じつに得大勢よ。私(釈尊)こそがその時、その期の『いつも“あなたは軽蔑されない方だ”と言う男』という名の菩薩であったのだ。得大勢よ、もし私によってかつてこの法門が(空中の音声より聞いて)把握(受け入れ、了解)されることがなかったなら、そして憶持(され、他人に語って聞かされ、解説)されることがなかったなら、私はこのように疾く無上等正覚を覚ることはなかったであろうものなのだ」(『土田本』pp. 322, 18－323, 1)

さて、この常不軽菩薩の振舞についての従来の様々な解釈は、端的に言って、話の全体像を捉えたものとは到底言い難いものである。このものが巷で出合う人々に見境なしになした“呼びかけ”のうち、前半の「私はあなたを軽蔑しません。あなたは軽蔑されない方です」というこ

の意表を突く言葉は、このもの自身が直ちに「なぜなら」と言葉を継いで「あなたはぼさつ行を行じなさい。（そうすれば）あなたは仏に成られるのですから」と言っているのであるから、このものは巷で出合う人々の全てを全く無条件に本来からぼさつ（成仏確定者）であると見做しているのであって、そのこと（「一切衆生は本来からぼさつである」）に揺ぎ無い確信を懐いていたからに違いないのである。なぜなら、凡そ「ぼさつ行」とは、本来からしてぼさつが為す成仏のための行為を指して言うのであって、ぼさつでないものに対して「ぼさつ行を行じなさい」と言うのは、「蛙の面に水」で、全く無用であるからである。それどころか、逆にこのものが出会う人を全て「本来からぼさつである」などとは全く思うことなしに、しかも「あなたはぼさつ行を行じなさい。仏に成られますから」などと言うことは、これほど相手を軽蔑し、侮辱した言葉はないであろうからである。それ故、このものは論理的に筋を通して言うならば、「あなたは自分では全くそうは思っていないでしょうが、じつは本来からぼさつ（成仏確定者）なのですよ。ですから、どうかその仏に成るための行、即ちぼさつ行を行じられますように」と声を掛けるべきであったのである。しかし、それでは、恐らくこの“呼びかけ”の持つ人の心底に届く威力は半減した、それどころか、全く無に帰したことであろう。

そこで、このものは「あなたはぼさつ行を行じなさい」と一番肝心なことをズバリ言ったのである。しかし、それのあまりにも唐突にして破天荒なる故に、少しでもショックを和らげようとする深い配慮から、私の「ぼさつ行を行じなさい」というこの“呼びかけ”は決してあなたを軽蔑して言うのではなく、あくまでも己の真実の想いを吐露したものであることを示さんとして「私はあなたを軽蔑するものではありません。あなたは（決して）軽蔑されるような方ではないのです」と言ったまでであって、それは一種前口上であったのである。

しかし乍ら、殆どの人々は、自分が本来からぼさつ、すなわち仏に成ることが確定している者であるなどとは到底考えも及ばないことであったし、しかもそれは全く見も知らぬ一介の出家修行者からの言葉であっ

たからして、世間の人々は次のような拒絶反応を示したのである。

「じつにこの菩薩がその折に比丘であれ、比丘尼であれ、優婆塞であれ、優婆夷であれ、そのように聞かせた人々のうちの殆ど全てのものは、このものに対して怒り、瞋恚し、嫌悪を生じ、罵り、非難する。『どうして、この比丘は問われもしないのに、(自分から)それは真実のものではなく、(まして我々から)願求されたものではないにも拘らず、我々に無上等正覚に向けて授記(するというとんでもないことを)しておきながら、それは(決して)“軽蔑の心(で言っているの)ではない”と我々に吹聴するのであろうか。(それは、その言葉とは全く裏腹に)じつに我々自身を軽蔑されたものにしている(=我々は軽蔑されている)のだ』と」(p.320,15－21)

しかし、このような世間の人々からの怒りや罵り、非難に遭っても、このものは“呼びかけ”を全く止めることなく、先に述べたように死期を迎えたとあるのである。

このような常不軽菩薩の振舞をもって、従来は、「人間礼拝行」、「仏性礼拝行」、あるいは「常不軽比丘の法難忍受の弘経」と解されてきたのであるが、しかし、このものは、なぜこのような罵りや非難を受けながらも、この“呼びかけ”を止めようとはしなかったのか、そのことこそが考究されるべきことであろう。確かに、「一切衆生は本来からぼさつ(成仏確定者)」ということは、そうではなくては一介の凡夫としての自己の「本来からぼさつである」ことによる成仏の絶対保証はないにしても、それはこのものの懐いた堅固なる信念であって、端から見れば、このものの懐いた謂わば偏見ないしは独断に過ぎない。それなのに、どうしてこのものは巷にうって出て、そこで出会う人々、一人ひとりに「あなたは本来からぼさつなのですよ。だからぼさつ行を行じられよ」と“呼びかけ”てまわったのか。このものの懐いた信念とこのもののとった行動との間には、一体、いかなる関係があるのか、このような行動を取らねばならなかった必然性は何であったのか。

もっとも、これが正覚を獲得した仏陀であるならば、話は別である。なぜなら、凡そ、仏たるもの、正覚を獲得しながら沈黙を守る、即ち、

説法教化をなさないものは仏陀には非ずして、独覚の他の何ものでもないからである。それ故に、『法華経』の「仏乗品」(『妙法華』「方便品」)は冒頭に、この点を押えて、

「舎利弗よ、『如来は(一切の声聞、独覚は勿論、菩薩によってさへも知り難い)偉大な、不可思議にして稀有なる仏の特質の獲得者である』とこのように言うだけで、私(仏陀釈尊)としては満足すべきなのである(即ち、これ以上言うべき言葉はない)」(p. 28, 19－p. 29, 1)

とあって、羅什が「止舎利弗　不須復説」と訳しているように、最早これ以上、言うべき言葉はないとしながら、直ちに、じつに未だその舌の根の乾かぬうちに、次のように言っている。

「舎利弗よ、じつに如来のみが、如来の特質を(衆生に)説示しうるのである。……じつに如来こそは一切諸法(＝一切衆生)(が何であるか)を知っているのだ。即ち、それら諸法(＝衆生)が何であるか、それら諸法がどのようであるか、それら諸法が如何ようであるか、それら諸法がいかなる相であるか、それら諸法がいかなる自性であるかを[4]。それら諸法について如来こそは“現証する者”であり、“明晰に見る者”である[5]」(p. 29, 1－7)

この“現証する者”、“明晰に見る者”とは、卑近な例で言えば、事件の現場目撃者であって、そのものには、それについての沈黙は決して許されず、必ず人に告げなければならないが、そのように、仏陀たるもの、物事、ここで言えば、一切衆生の真実相を仏智によって現証し、明晰に見た以上は、決して沈黙は許されず、それを衆生に説示しなければならないのであって、それは仏に課せられた仕事、任務、さらに謂うなれば責務なのである。

ここをもって、「仏乗品」は、この後、三止三請、五千起去を経て、遂に、次のように述べている。

「舎利弗よ、‘正法’(‘saddharma’,「妙法」＝「仏の意図に基づいてこれから説かれるもの」)は(一切の声聞、独覚、菩薩の論理的思考によっては)思考されえず、思考の領域にはなく、如来のみの知ると

ころである。なぜなら、舎利弗よ、凡そ、如来はただ一つの為すべき事のために、ただ一つの任務のために、世に出現するからである」(p.37,1－3)

と言い、

「じつに舎利弗よ、如来はただ一つの乗、即ち一切知者たることを究竟とする、ぼさつを鼓舞すること(『妙法華』「教化菩薩」)たる〈仏乗〉をよりどころにして衆生に(正)法を説くのである。[6] 即ち、衆生に如来の智による洞察(仏知の見)を示すために如来は世に出現する。衆生に如来の智による洞察を理解させるために如来は世に出現する。衆生に如来の智による洞察を悟認させるために如来は世に出現する。衆生をして如来の智による洞察の道(実践)に入れしめるために如来は世に出現する。舎利弗よ、これが如来のただ一つの為すべき事、ただ一つの任務なのである」(p.37,6－8)

と言っている。

ここに、一切衆生が何であり、どのようであり、如何ようであり、いかなる相であり、いかなる自性であるか、即ち、一切衆生の真実相、それは仏のみの知ることろなる故に、仏は必ずそれを衆生に説き示さなければならず、それこそは仏の世に出現する唯一の、即ち究極の仕事、任務であって、この一切衆生の真実相を明かす最終説法を「正法(妙なる教法)」と呼ぶ。そして、凡そ仏たるものがなす、この仏知の見を衆生に示し、理解せしめ、悟認せしめ、その道に入れしめるという一連の過程を要約して、じつに「ぼさつを鼓舞すること」と言っているのである。それ故、ここに謂うところの「如来の智による衆生洞察」即ち「仏知の見」の中身、「一切衆生の真実相」とは「一切衆生は本来から――全く無条件に――ぼさつ(成仏確定者)である」ということに他ならないことが明白となるのである。

凡そいかなるものも全く無条件に本来からぼさつであるならば、後はぼさつ行の実践によって、いつか仏に成ることは絶待保証される故に、この仏知の見の示、悟、入道、即ち、ぼさつ鼓舞という教法は、「一切衆生が仏に成る教え」として〈仏乗〉と命名され、それは一切衆生を残

りなく全て包摂する故に、乗はこの〈仏乗〉唯一つであって、その意味で、唯一つの乗、即ち「一乗」と謂われているのである。(7)

こうして、『法華経』前半部の根本主張は「一切衆生は本来からぼさつ（成仏確定者）である」ということであり、それは常不軽菩薩の懐いた確固たる信念、即ち「一切衆生は本来からぼさつ」そのものであり、後はそのもの自身のぼさつ行の実践によって必ず成仏があるという確信と全く同一であることが明白である。このことは、この常不軽菩薩の説話そのものが『法華経』作者の創作である故に当然といえば当然のことであるが、しかし、その同じ「一切衆生は本来からぼさつ（成仏確定者）」ということを、『法華経』作者は、「仏乗品」でそれの論証不可なるが故に、「仏知の見」（如来の智慧による衆生洞察）であるとして、謂わば仏に丸投げしてしまっているのに対して、常不軽菩薩の場合はそうではなく、くる日もくる日も僧院から飛び出し、巷で出会う人々の一人ひとりに向かって、「ぼさつ行を行じなさい。仏に成られます」と“呼びかけ”てまわるという、一見奇人・変人的な振舞をなしているのである。

ここにおいて、常不軽菩薩をしてこのような行動をとらしめた『法華経』作者の意図するところを忖度するならば、常不軽菩薩にとって「一切衆生は本来からぼさつである」は、それなくしては自己の成仏は絶対に不可能であるとはいえ、己の偏見ないしは独断の他の何ものでもないのであり、しかも今は威音王仏の滅後、無仏・悪世の真只中であって、『法華経』「仏乗品」におけるように、これを仏智による洞察として、謂わば仏に下駄を預けることも出来ないのである。そのような状況下にあって、常不軽菩薩――それはとりも直さず『法華経』作者――は「一切衆生は本来からぼさつ」をいかにして普遍の真理として定立することが出来るのか、この一点にまさに必死の思いで瞑想を深めたに違いない。そして、その瞑想の極において、「一切衆生」といっても現前に存する一人ひとりを措いて他にない故に、その現在前する人々の一人ひとりに「あなたは本来からぼさつなのです」と声をかけていって、呼びかけられた人が、この呼びかけを受け入れようが、受け入れまいが、そん

なことは全く無関係に、それによってこのもの自身が声をかけた人一人ひとりのぼさつであることを確認していくならば、その終極、即ち全ての人に声をかけ終った時点において、一切衆生の本来からぼさつなることが確定するのではないのか。そして、その時こそ一切衆生の中の一人であるこの凡夫の自己もまた本来からぼさつ（成仏確定者）であることが理の当然として確立するというものであったろう。瞑想の極にこの思いに達した時、このものは矢も楯もたまらず僧院から巷に飛び出し、そこで出会う人々に片端からこの“呼びかけ”をしてまわったに違いないのである。

このような忖度は、全く荒唐無稽な夢想の他の何ものでもないとされるかもしれないが、しかし、このものがいかに罵られ、非難されようとも、“呼びかけ”を止めることなく続けたところには、まさに「千里の道も一歩から」であり、土くれや棒切れを投げつけられれば、それの届かない処まで逃げて、そこから大声を挙げて“呼びかけ”たというところには、そこに一人でも漏れれば、まさに「堤防にあいた蟻の穴一つ」で、たちまちに「一切衆生の本来からぼさつ」は成立しないのである。

かくして、僧院での、大乗・菩薩乗（『般若経』）の修習によっては未来成仏の確信を得られなかった常不軽菩薩・比丘にとって、自己の成仏を絶対保証する「一切衆生は本来からぼさつ」を普遍的真理たらしめるべくなしたこの“呼びかけ”は、己の宗教的身命、それは今生のみならず無量の後生の身命を賭しての、不退転のぼさつ行そのものであったに違いないのである。そして、このことは一人の仏に非ざる無名の比丘が己の未来成仏を期して、釈尊の入滅後、数百年も経た時になって『法華経』という経（仏の金口直説）を創作し、世に問うに至ったその思想と行動とに全く合致するものであったのである。

それはそうであっても、しかし、この話がここで終わったならば、常不軽菩薩のこのような行動（呼びかけ）は、いかにそれが己の身命を賭してのものであっても、ただこのものだけの自己満足であり、どう考えても、変人・奇人的振舞に過ぎないと見なされたであろう。

しかし、決してそうではなく、このものの“呼びかけ”の意趣する

「一切衆生は本来からぼさつ」こそは『法華経』の根本主張であり、まさしく「一切衆生皆成仏道」の仏教を成り立たしめる根本原理そのものであることを明らかにするべく、この後、このものは死期に臨んで、かつて威音王仏が在世中に説いた『法華経』を誰かが語る空中からの声によって聴聞し、それを完全に理解し、把握して、己の寿命を超神秘的付与によって延長し、今度はその『法華経』を人々に説き聞かせたと語られているのである。

このことは、このものの臨終時における『法華経』聴聞が、この“呼びかけ”という行動の得果、果報としての利益（功徳）ではなく、“呼びかけ”の根本依拠たる「一切衆生は本来からぼさつ」が仏陀の金口直説たる『法華経』の主張そのもの、まさしく仏教の真髄であることを証せんとするものであり、それ故に、その後の『法華経』唱導ということも『法華経』の伝道・弘通を奨励せんとするものでは決してないのであって、これまでになしてきた数十年に亘る“呼びかけ”と全く同じもの、謂わばそれの同一延長線上にあるところの彼自身の（自利の）ぼさつ行そのものであったのである。

それ故、常不軽菩薩は、今生だけで終ることなく、後生においても無量の“月の音の王”という同名の仏の在世に生まれ合わせた時には菩薩として仏に仕え、その仏の〈仏滅後〉に生まれた時には、この“呼びかけ”をなし、臨終時に『法華経』を空中からの声によって聴聞し、今度はそれを四衆に説き聞かせたのであり、さらには、“太鼓の音の王”という同名の無数の仏の世でも、“雲の音の王”という同名の無数の仏の世でも同様であったのであり、このぼさつ行の果てに、遂に今、仏陀釈尊としてこの世に出現しているのだと説かれているのである。

これは、〈仏滅後〉における常不軽菩薩の“呼びかけ”とその後の『法華経』唱導ということ、しかもその後の無量生における同一所行の繰り返しこそが、このものにとって他ならぬ自利・利他一体のぼさつ行そのものであったことを明白に証するものである。

このように、常不軽菩薩の無量生に亘る〈仏滅後〉における「あなたは本来からぼさつなのですから、ぼさつ行を行じなさい。仏に成られま

す」という“呼びかけ”とその後の『法華経』唱導という生き様は、現実のインド仏教において〈仏滅後〉に登場した一人の仏に非ざる無名の比丘による『法華経』の創作とそれの唱導に込められた甚深の意図を、『法華経』の中に謂わば「劇中劇」として、赤裸々に、かつ見事に述べたものに他ならない。

こうして、「常不軽菩薩品」は次の偈をもって結びとする。

「それ故に、このような自存者（＝仏）によって自ら宣説された教法（随自意の説＝『法華経』）を聞いたからには、（それを）憶持し、私（釈尊）の滅後に幾度も幾度もこの経を説き明かすべきである」〔12〕

これは、『法華経』の最終章たる「如来神力品」最終偈と全く同じである。

「それ故に、じつに賢明なるぼさつたちは、このような功徳利を聞いたからには、私の滅後に、（この）経を憶持（し、語って聞かせ、解説）すべきである。それらのものたちには、（将来、いつか）正覚（を得ること）において（いささかの）疑いもあろうはずがない」〔14〕

これによって、『法華経』は、単に「一切衆生は本来よりぼさつ」という「仏知の見」を衆生に示・悟・入道する“ぼさつ鼓舞”たる〈仏乗〉を明かすだけのものではなく、むしろ後半の、仏から見捨てられた〈仏滅後〉の衆生に対して、この『法華経』の聴聞によってこそ自己の本来からぼさつなることを知り、後は自身のぼさつ行の実践より他にはいかなる成仏道もないことを明かすものなのである。それ故に、〈仏滅後〉の衆生に語り聞かせる『法華経』唱導という行動は、単にそれの伝道・弘通というような、謂わば二次的行為ではなく、それより他に自身の成仏道はないというまさに自利・利他一体のぼさつ行そのものなのである。

おわりに

常不軽菩薩の“呼びかけ”とその後の『法華経』唱導という振舞をこ

のように解するとき、表題の「お題目はなぜ唱えるものなのか」という問の答えは、もはや多言を要することなく自ら明白であろう。常不軽菩薩の“呼びかけ”、すなわち、

「私はあなたを軽蔑しません。あなたは軽蔑される方ではありません。なぜなら、(あなたは自分では全くそうは思っていないでしょうが、じつは本来からぼさつ〈成仏確定者〉なのですよ、ですから)ぼさつ行を行じなさい。あなたは仏に成られます」

は、羅什によって、「我深敬汝等　不敢軽慢　所以者何　汝等皆行菩薩道　当得作仏」と漢訳されている。ここをもって、日蓮は、

「爾りと雖も仏の滅後に於いて四味・三教等の邪執を捨て実大乗の法華経に帰せば、諸天善神並びに地涌千界等の菩薩、法華の行者を守護せん。此の人は守護の力を得て、本門の本尊妙法蓮華経の五字を以て閻浮提に広宣流布せしめんか。例セバ威音王仏ノ像法ノ時、不軽菩薩『我深敬』等ノ二十四字ヲ以テ彼土ニ広宣流布シ、一国ノ杖木等ノ大難ヲ招キシガ如シ。彼ノ二十四字ト此五字トハ其語殊ナリト雖モ其意之ニ同ジ」(原漢文　「顕仏未来記」『定遺』740頁)

と述べて、常不軽菩薩の“呼びかけ”と、南無妙法蓮華経の五字七字とは、その意において全く同じであるとしている。勿論、「妙法蓮華経の五字は経文に非ず、其の義に非ず、唯一部の意のみ」(「四信五品抄」『定遺』1298頁)であるが、しかし、ただそれだけではなく、この後直ちに続けて「初心の行者其の心を知らずとも、而も之を行ずるに自然に意に当るなり」(同、『定遺』1298頁)とあって、文中の「之を行ずる」とは、前文に「汝何ぞ一念三千の観門を勧進せずして、唯、題目許りを唱えしむるや」(同)とあり、次下に「一分の解無くして但一口に南無妙法蓮華経と称うる」(同)とある如く、あくまでも妙法蓮華経の五字は「口に唱うる」もの「声に出して唱える」ものであること、じつに明々白々であると言わねばならない。

それ故に、『観心本尊抄』に「釈尊ノ因行果徳ノ二法ハ妙法蓮華経ノ五字ニ具足ス。我等此ノ五字ヲ受持スレバ、自然ニ彼ノ因果ノ功徳ヲ譲リ与ヘタマフ」(『定遺』711頁)とある「此ノ五字ヲ受持スル」とは、

『四信五品抄』にいう「之を行ずる」と同じ意味であって、それはじつに「但一口に南無妙法蓮華経と唱える」ことであって、それ以外の如何なる意味も持たないのである。冒頭に挙げた『諫暁八幡抄』の「只妙法蓮華経の七字五字を日本国の一切衆生の口に入れんとはげむ許也」の「口に入れる」という意味も、あくまで、「声に出して唱え聞かせる」ということに他ならない。この日蓮の立教開宗から池上入滅に至る全生涯において、只南無妙法蓮華経の七字五字を日本国の一切衆生の口に入れんと励げんできたことは、上述の如く、まさしく常不軽菩薩の“呼びかけ”とその後の『法華経』唱導という振舞に全く同じものである。即ち、常不軽菩薩にとって“呼びかけ”は己の成仏のための実践行、即ち自利・利他一体のぼさつ行に他ならなかったように、日蓮にとってもお題目を衆生の口に入れること、唱題――お題目を唱えて聞かすこと――は日蓮自身の成仏のための行、即ち「他人にも致し、我をも致す」自利・利他一体のぼさつ行の実践であったのである。(8)

註

(1) 『浅井圓道先生古稀記念論文集　日蓮教学の諸問題』（平成９）525頁―550頁、『興隆学林紀要』第九号（１頁―23頁）、転載。

(2) 以下の叙述については、拙著『法華経〈仏滅後〉の思想』（平成21年、東方出版）を参照。

(3) これと「増上慢」とは明確に区別されなければならない。増上慢のものは、自分では”覚りを得た”と思い込んでいるから他人に覚りを得たというのであって、これは大妄語（うそ）ではないのである。

(4) この個処は『妙法華』に「唯仏与仏乃能究尽諸法実相所謂諸法如是相……本末究竟等」とあり、羅什の恣意的な改変であることは、つとに本田義英博士の明らかにされたところである。

(5) 「如来こそは“現証する者”、“明晰に見る者”である」の文が『妙法華』には全く訳出されていないのは、極めて不審である。但し、「薬草喩品」の「如来は“現証する者”である」の文は「唯有如来如実見之」と訳出されている。

(6) この一段の文は現行梵本全てに欠くものであるが、直下に「じつに舎利弗よ、私（＝釈尊）こそはぼさつを鼓舞するものである。（P本による）……じつに舎利弗よ、私（＝釈尊）こそ唯一つの乗、即ち〈仏乗〉をよりどころにして衆生に（妙）法を説く」（『土田本』p.39,19－22）とあり、この処は『妙法華』に「仏告舎利弗　諸仏如来　但教化菩薩　諸有所作　常為一事……舎利弗　如来但以一仏乗故為衆生説法」と訳出されており、さらに過去仏章（同. p.38,2－5）、未来仏章（同. p.38,17－20）、現在仏章（同. p.39,4－7）、釈迦仏章（同. p.39,19－22）には「一切知者たることを究竟とする、ぼさつを鼓舞することたる〈仏乗〉」とあるところから、このところに存したものが後に脱落したものと考えて、復元したのである。

(7) 以上の論考については拙著『法華経一仏乗の思想』第二章　第二節の一「仏出現の唯一目的ーその本文復元」（pp.88－124）を参照。

(8) かつて立教開宗750年に当り、日蓮宗が「お題目総弘通運動」と称したのに対し、本宗は「お題目総下種運動」とし、それに「菩薩行の実践」という語句を添えた、その意趣は実にここにあったのである。

〈キーワード〉　常不軽菩薩の〝呼びかけ〟　日蓮の題目口唱　天台止観の超克　末代幼稚のぼさつ行

［付記］

平成十七年十月に身延山大学において開催された第五八回日蓮宗教学研究発表大会で、「身延山学園創立450年記念特別部会」が「脱構築・法華経と日蓮聖人」のテーマで設けられたという。その折の二、三の研究発表が『身延山大学　東洋文化研究所所報』第10号（平成十八年四月）に掲載されている。その中に、蓑輪顕量「止観の立場からみたお題目」（『同』、47～68頁）があって、そこには「お題目を唱えることによって、『法華経』の功徳が一身に備わると教学的には説明されるが、瞑想という視点からみたらどうなるであろうか。お題目を唱えることは、実は唱えるという行為に注目すると、唱えるという一つの行為に専心していることになる。これは瞑想の基本的な要素である『心一境性』を確保していることに他ならない。……お題目を唱

えることが簡単な「止」の訓練になっていることは間違いない」(61頁) とあり、「おわりに」で「以上、簡潔に瞑想の基本を踏まえながら、唱題の考察を試みた。どちらかといえば教理的な側面から焦点が当てられ、教理上の意味が強調されがちなお題目に対し、修行道の観点から見たらどうなるかを考えてみた。インド仏教から伝えられた瞑想修行法という視点から見れば、唱題には止（止観の「止」で、「心一境性」のこと――引用者注）の側面が濃厚に感じられるのである。ここに唱題には確かに仏法の伝統が息づいていることを指摘しうる。また、日蓮聖人は題目に対して、教門における意義と観門における意義という双方を意識していたと思われることを指摘した。教理上だけではなく修行道という視点からも、唱題をもう一度、位置づけ直す必要があるのではないかと考える次第である」(66頁) とある。この論考に触発されて、拙稿はなった。(平成22年８月)

〔後書〕

前川健一「新仏教の形成」(『新アジア仏教史12日本Ⅱ「躍動する中世仏教」』佼成出版、平22) に「日蓮は、一般に日蓮宗諸派の開祖として位置づけられ…。(中略) 日蓮自身に特定の一宗を開く意志があったのか、さらに客観的にみて一宗を開いたといえるのか…。(中略) 一般に宗派の独立を示すものは、独自の教判の成立である。(中略) 日蓮は天台宗の五時八教の教判を基本的にはそのまま踏襲しており、独自の教判は示していない」(123～124頁) と。しかし「日蓮の思想を一言でいえば、題目 (南無妙法蓮華経) 至上主義である。(中略) 日蓮は特に『法華経』のみが一切衆生の成仏を可能とすることを強調する。しかも日蓮は末法思想にもとづき、『法華経』そのものは末法においては効力を失い、末法においては『法華経』の精髄である「南無妙法蓮華経」のみが正法となるという」(129～130頁) とある。この論を自家撞着と批判することは容易いが、しかし、法華宗教義こそ宗祖の本義を明かすという一種惰眠に対する厳しい警鐘ととるべきであろう。このことは、すでに大平宏龍「『観心本尊抄』拝読私見」(『桂林学叢』21号) に「一念三千仏種は我々にとり、観照による獲得は不可能で、題目の信行による外ない。(中略) 一念三千哲学などというみかたとの決別を…。(中略) 斯界の再考を喚起する」(27-28頁) (「ただ題目を口唱するという信行」と読むべきか) と述べられているところである。(23／２／21)